部室の歴史

部　室　の　歴　史

昭和7年1月に竣工された旧部室が，改築のため平成9年11月に解体されました。これに先立ち，平成9年9月27日に旧部室にて，OB，現役が集い最後のお別れ会を行いました。当日は多数のOBが参集し，長年親しんだ部屋に名残りを惜しんでおられました。

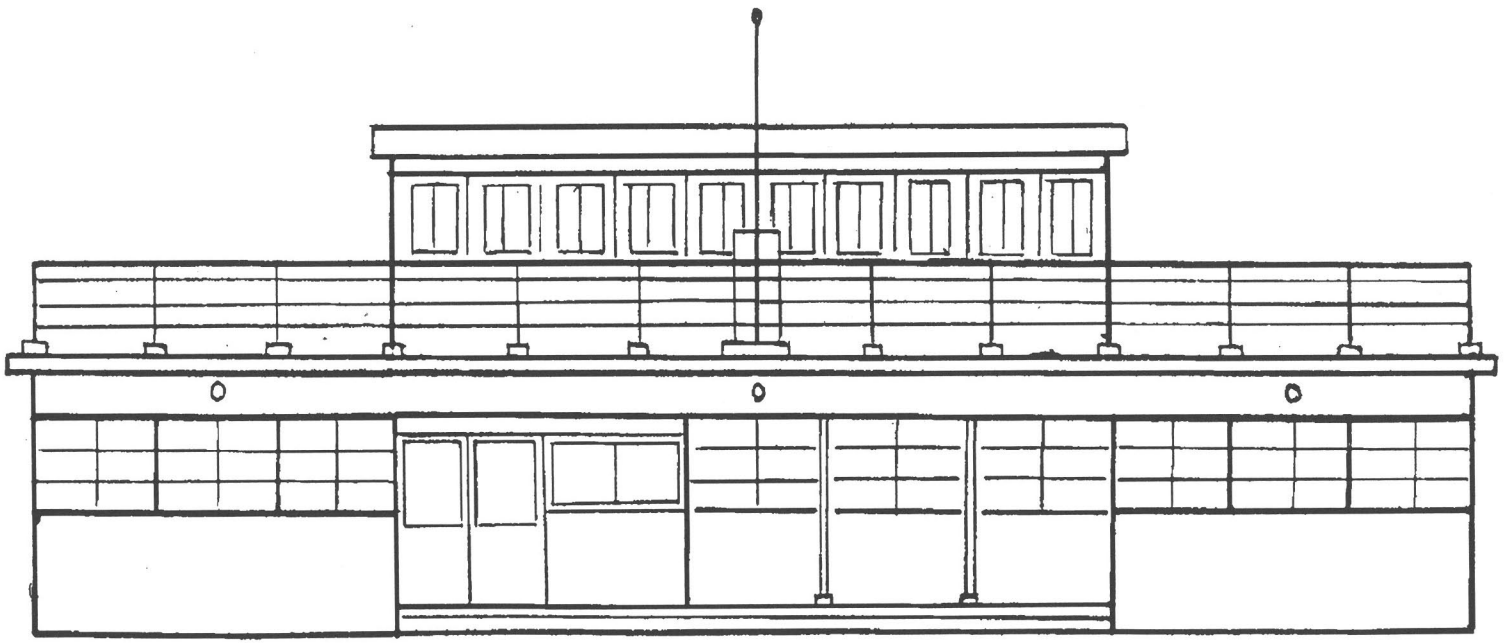
なお，新部室は平成10年8月に竣工された3階建の立派な建物の1階部分に収納されました。

旧部室お別れ会　平成9年9月27日

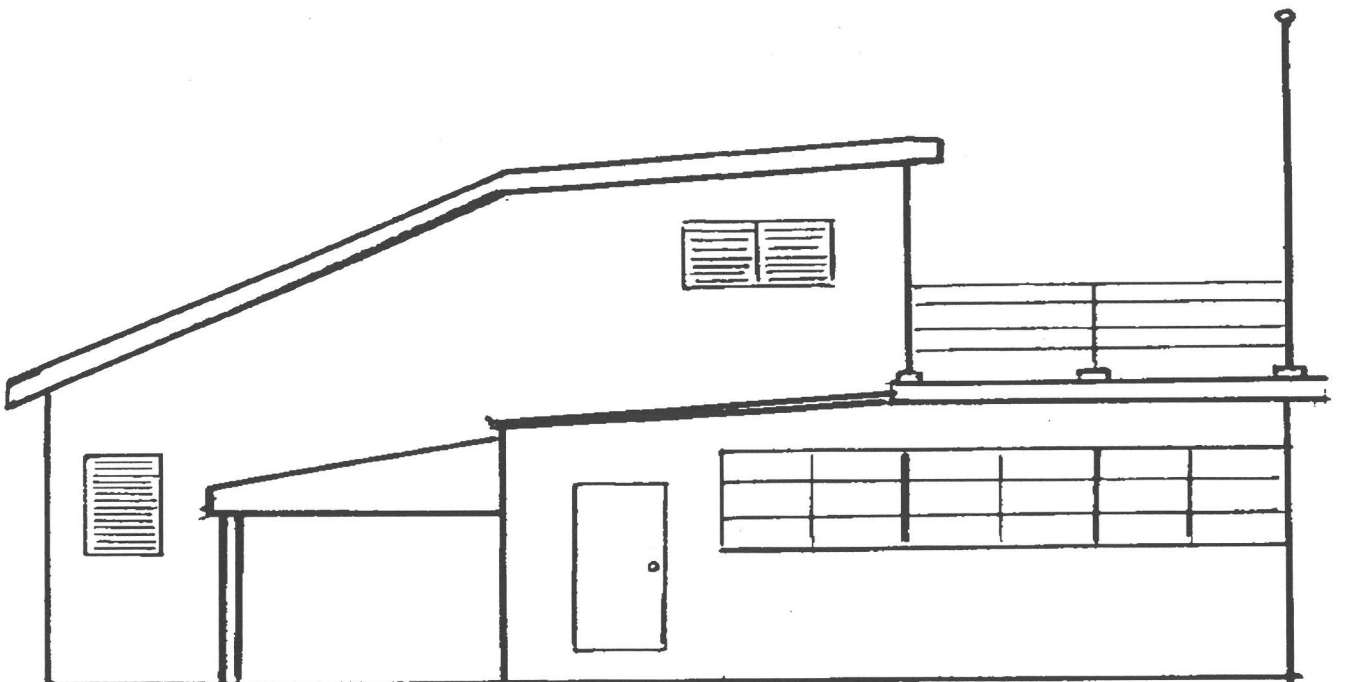
一橋大学陸上競技部部室（正面図）

竣　工　　昭和７年　１月

解　体　　平成９年１１月

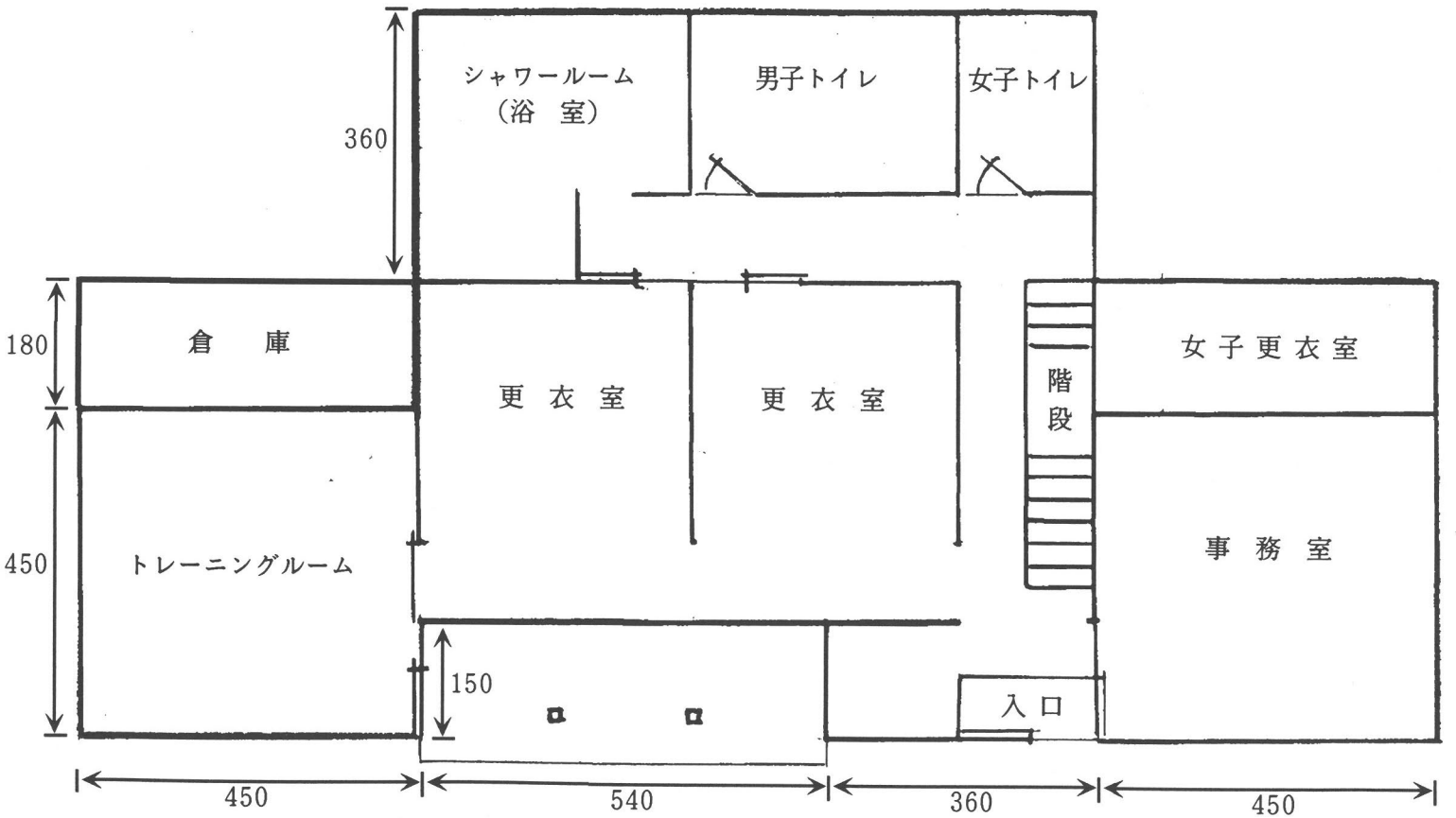


側　面　図



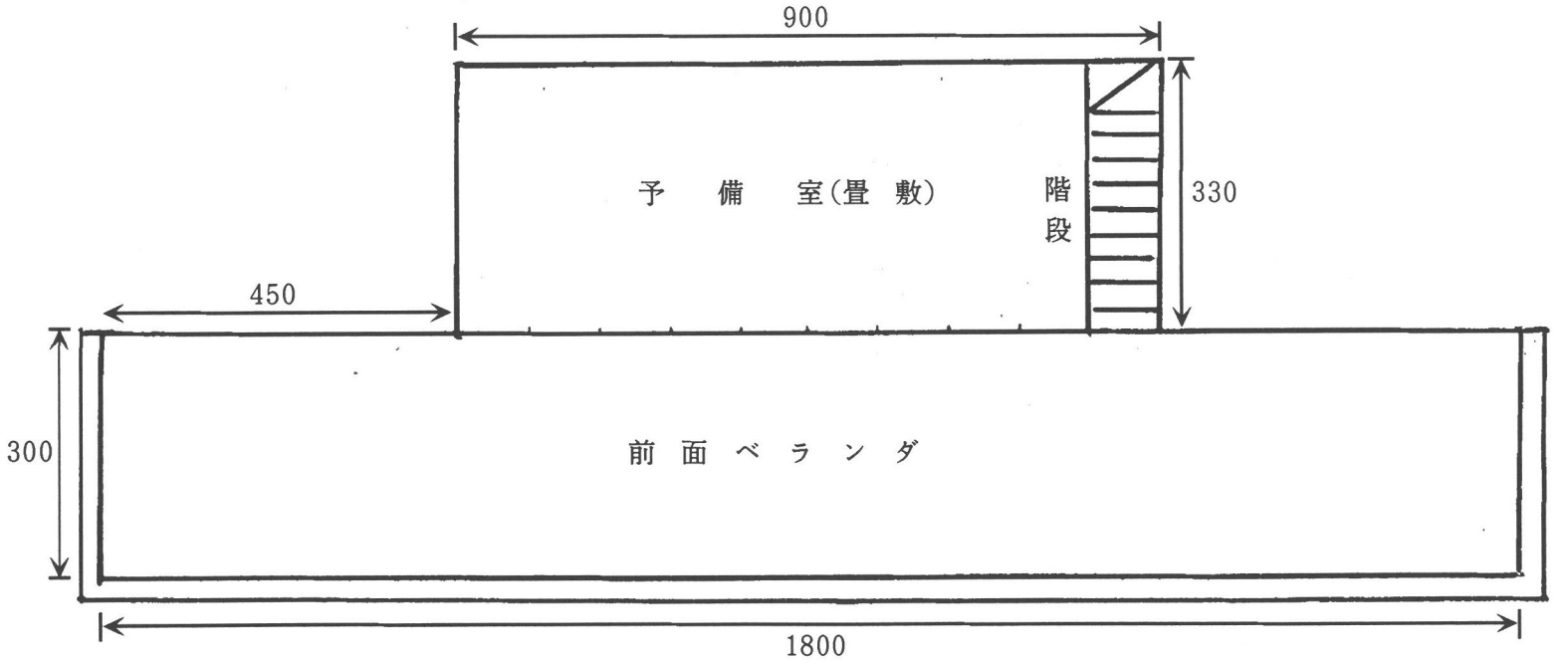
一　階　平　面　図

（床面積　137.70㎡）



二　階　　平　面　図

（床面積　29.70㎡ 除くベランダ）



沖縄合宿の歩み

沖縄合宿の歩み

第1回	（昭和42年3月9日から3月20日まで） 38名参加 吉見（昭和11年卒）同行	琉球大学グランド （那覇市首里市）
第2回	（昭和46年3月8日から3月24日まで） 38名参加 日月（昭和41年卒），遠藤（昭和43年）同行	琉球大学グランド （那覇市首里市）
第3回	（昭和49年3月16日から3月29日まで）33名参加 水野（昭和42年卒），金氏（昭和47年卒）同行	琉球大学グランド （那覇市首里市）
第4回	（昭和53年3月8日から3月23日まで） 36名参加 吉見（昭和11年卒），水野（昭和42年卒）同行	琉球大学グランド （那覇市首里市）
第5回	（平成元年3月10日から3月17日まで）37名参加 阿部（昭和29年卒），水野（昭和42年卒）同行	琉球大学グランド （中頭郡西原町）

● **第1回 （昭和42年3月9日から3月20日まで）**

沖縄遠征に参加して

監督　吉見泰二

昭和42年3月9日午後7時琉球大学グランドの一角にある木造平屋建の柔道場で，本日午後本土から着いたばかりの陸上競技部員38名を前にして監督として挨拶に立った時，本土を遠く離れて再会する感激とともに，多くの想が忽然として胸中に沸き上がって暫らくは声にならないのでありました。

昨年秋，日本陸連で田中事務局次長から，一橋大学陸上競技部の沖縄遠征の勧奨を受けてから，先輩団現役部員との連絡募金等多くの手数を経たのでありますが，その間，小生を最も力づけ又喜ばせてくれたことはどの先輩にお会いしても「大変佳いことだから是非成功させてやって欲しい」と，もろ手をあげて賛成して下さったことです。

尾本幹事長と御相談して何人かの先輩には経済的御負担を御願い申し上げたところ，何れも快く援助して下さった次第で，この機会に厚く御礼申し上げます。

3月9日午後1時半，沖縄泊港にて下船した一行は，伊良波沖縄陸協会長・宮城理事長・大城琉球大学学生部長・石垣琉球大陸上部前主将並びに先行した小生等の出迎えを受け，泊港から直ちに戦跡巡りにバスで出発しました。内地でも著名な姫百合の塔，健児の塔に内地から持参した花束を棒げ，その冥福を祈ったのでした。部員全員が黒一色の学生服に統一した事と上陸後直ちに慰霊塔にお詣りした事は，現地関係者に極めて強い感銘を与えた様でした。翌10日から合宿練習に入ったのですが詳細は学生側の報告を御覧下さい。

本遠征に際しては学生側も充分準備に努力し，「沖縄県」と題する約30頁のガリ版刷りパンフレットを作成，政治，経済，教育二法，本土復帰問題等を極めて詳細に解説し，全部員に配布したことは流石だと思われます。また遠征中は全員禁酒禁煙を厳守し，規律ある行動に終始し，トラブルが全然なかったことは監督として実に嬉しく思う次第です。学生方役員の方はいろいろと御苦労様でした。

尚，現地においては沖縄陸上競技協会・琉球大学・琉球セメント株式会社の関係者の方々には非常に御世話になり，本遠征成功の大きな一因となりました。誌上を借り改めて厚く御礼申し上げる次第です。本当に有難う存じました。

沖　縄　遠　征

主将　遠藤恒夫

1967年3月，我が一橋陸上部は，先輩の皆様はじめ，琉球大学の方々等の多大なる御支援のもとに，創立以来初めての海外遠征ともいえる沖縄の地に合宿遠征に行って参りました。透きとおるような紺ぺきの海と澄みきった青い美しい空そして緑にかがやくサンゴ礁にかこまれた南国の島，沖縄。しかしその影に秘(ひそ)む，悲しい思い出，「ひめゆりの塔」，今なお残る多数の軍事基地，何一つ我々の胸をうたないものはありませんでした。

このような地に，合宿遠征できましたことは，我々部員にとって一生の思い出でありますと同時に，これからの陸上部発展の上にも大きな足跡を残すことと確信しておりま

す。我々は，11日間の長期に亘り，琉大の柔道場に38名全員が一緒に生活し，琉大陸上部の人達とともに，練習を重ね，そして，琉球大，国際大，沖縄大，沖縄実業団のアスリートとともに，自分達の手でウォッチを握り，記録会を開き，大いに陸上競技を通じて親善を深めて参りました。それとともに，都留先生のおっしゃられた「単なる陸上の合宿だけではなく，大学生として，沖縄の人々と話し合ったりして見聞をひろめてこい」とのとおりに，琉大の寮や，ミーティングで，琉球大学，沖縄大学の陸上部とともに，話あったり，琉大の陸上部と観光にでかけたりし，沖縄というところを，我々自身のはだで感じて参りました。

このように，さまざまな人々と触れあい，さまざまな尊い経験をえた遠征も無事終了致しましたが，我々はこの遠征で得ました尊い経験をこれからの陸上部に生かしていきたいと存じます。そして我々を気持ちよくむかえて下さった琉大とは，これを機会に，密接に交流し，何年かに一度，沖縄の地を訪れることができればと思っております。

最後に監督として，現地までおいで下さり，お世話下さった吉見先輩はじめ，遠征に際し，さまざまな御援助をたまわった先輩の方々に心からのお礼を申し上げますと同時に，石垣前主将，伊芸主将はじめ，琉球大陸上部の方々にも厚く感謝の意を表したいと存じます。

深遠なる一橋大陸上部

沖学連幹事長　石垣　洋

その後も元気のことと思います。遠く14万4400㎞の道程，東京より日本の最南端，沖縄での合宿，私達沖縄の者にとっては考えることのできないスケールの大きさ，不可能を可能ならしめる一橋大の陸上に対する情熱は警きと深遠なものがある。情熱の結集が各自にあればこそ全員の参加を見，ここに遠く沖縄での合宿を見ることができたことだと思います。一橋大クラブ全員の陸上に対する自覚は偉大なものがあると思う。沖縄が遠く本土より遅れを見ているひとつの原因はそう云う陸上に対する自覚の欠如が存在しているからであると思っている。一橋大帰京後分析しようと考えている今日である。又，アマチュアースポーツの本質を見極め，追求するためにも，人間性を確立し，陸上競技を高めるためには最高の努力と，最高の情熱を日常生活に見，邁進しなければなら

ぬと思い，悟りながらも，地理的条件が条件だけに，時間の経過と習性に妥協し，目標を忘却の彼方におししまう精神のか弱さが沖縄の私達には多分にあると思っています。そういう沖縄の精神を一橋が鼓吹し，位置づけを見出した今回の沖縄の合宿にたいして私達は一橋大陸上部に感謝申し上げます。一橋大を回想して考えると，考えさせられる点が多彩であり，深遠なる興味を覚えます。1年間の合宿が年に実に7回というクラブのカラー，その根流にある陸上競技の情熱とチームワークの美，東大打倒も必然的であり当然であったかと思います。名実ともに優勝とはそのことだと思う。又，大学に入学して陸上競技をするという一橋大学，見るからにはそうであり，そうであった。打算的なプロ化した走法に比較して，素朴であり美しく，虚心坦懐に走る走法は，アマチュアスポーツに生きる者の走法であり，何かそれとなく純粋なものがあり，感動を覚えさせる一橋であった。沖縄合宿も，はや2ヵ月余の月日が経過し忘却を見る時かと思っていましたが，忘却どころでなく，ますます一橋大の放つ新鮮さと，親しさを次から次へと覚え展開され，忘れることのできない，歴史的なものに到達をしています。3月18日の記録会がそうであり，私達にとっては初の経験であり，意義深く，そこから学びとるのも意義深い，学生スポーツは競技だけでなく，あらゆるすべての運営も，しなければ学生競技者としての価値，真の陸上競技者に値しないという全人格的記録会を説いた四大学記録会，実にすばらしかった。それも一橋大の今回の沖縄合宿の賜であり，これをもとに，学生陸上競技沖縄の陸上競技を発展させたいと思っています。

今回の一橋大の合宿が単なる自己中心的な合宿でなく，地域社会へのスポーツ振興，又は，陸上競技の底辺拡大にも示唆を求めたのに対して敬意を表し，一橋陸上部の偉大さに脱帽する。私達もそういう一橋大学陸上競技のカラーを期待し，3月18日を一橋大沖縄合宿記念として，三大学が初年の記録会日を3月18日に定めたいと思っています。又，沖縄合宿が再度実現するよう希望し，一橋陸上競技部の発展を祈る。

沖縄合宿行動表

月日	曜	内　　容
3/6	月	東京駅集合　19：00　　20：30 発　急行「瀬戸」
7	火	神戸着 7：03　出国申請，検疫，税関手続，17：00 神戸港発
8	水	関西汽船「沖之島丸」
9	木	泊港着　13：00　　南部戦跡めぐり
10	金	練　習
11	土	
12	日	
13	月	
14	火	
15	水	
16	木	中北部バス旅行
17	金	クランド整備，軽い練習
18	土	記録会（琉球大，沖縄大，国際大，実業団，一橋大） ミーティング
19	日	軽い早朝練習，自由行動
20	月	〃　　泊港発 13：15（琉大，沖大の見送りあり）
21	火	
22	水	
23	木	8：00　神戸港着　入国申請，税関手続 12：00　解散

会　計　か　ら

会計　藤岡幹司

色々と大変だった沖縄合宿ですが，又会計にとっても全く大変な合宿でした。普段の合宿ですと金を集めて，後はおばさんよろしくやってもらうだけで，決算報告が少々面倒な位ですが，今度の場合は出かける迄が先ず一仕事。さらに向うに着いてからは馴れないドルを片手に寮の事務所へ行ったり，生協へ行ったり（かわいい女性がいたので必要以上に行ったきらいもないではないが）港までのバスの手配にバス会社へ行ったりウロウロする毎日でした。

何しろ総額60万円近い大金が動いた訳ですから，時には30万円もの金をカバンにいれて出かけた時もありました。又沖縄へ着いてからは，１ドル紙幣から100ドル紙幣までみんな同じ大きさ，同じ色，同じような図柄で，さらに見馴れないせいか，どうもおもちゃの紙幣のような気がして，円に概算すると６桁にもなる大金のような気がせず，出かける前とは逆の意味で困りました。

お陰様でとにかく本土の土を踏んだ時には全く本当にホッとしましたが，しかしそれからも両替決算報告と合宿が終わったのにウロウロで会計をやるのが全くいやになってしまいました。それも終わってみれば……ですが。

決算報告は別掲してありますので，よろしく御覧下さい。尚御寄附をいただいた先輩諸兄の御芳名も別掲してありますが，使わせていただいた側を代表いたしまして，厚く御礼申し上げます。

沖縄合宿決算報告

収入の部		
部員より徴収	298,930	円
先輩より寄附	500,000	
その他	20,000	
計	818,930	

支出の部	
汽車賃	101,590
船賃	277,896
食費	92,173.45
器具送料	1,497
救急箱	3,060
先方へ土産	5,000
謝礼	8,591
ペナント	2,000
印紙代	12,000
写真代	1,047
注射代	5,200
パンフレット作成	1,115
ミーティング	5,588.15
バス代等	24,246
その他雑費	15,931.55
両替による損金	1,750.85
計	558,636.00

差引残高　260,294　円

（但し，1ドル＝365円）

沖縄遠征寄附金一覧表

氏名	寄附金
山根春衛	50,000 円
水上達三	50,000
村木武夫	50,000
岡田悌蔵	50,000
尾本信平	50,000
小林主	50,000
吉見泰二	50,000
新谷健市	30,000
石平一郎	20,000
金子珪亮	20,000
松原美義	20,000
深川登代仲	20,000
川北順之祐	10,000
榎本鋲太郎	10,000
富士豊	10,000
加藤好三	10,000
計	500,000

この他，司寿司と都留重人先生から，合せて20,000円の寄附がありました。

（以上「ATHLETIK FREUND 1967 ―沖縄合宿特集号―」より収録）

昭和42年3月琉球大学グランドにて吉見先輩を囲んで

右から青木，水野，山崎，松本
昭和42年3月琉球大学グランドにて

身分証明書に関する注意

1. 身分証明書は次の各号の一に該当する場合には、その効力を失う。

a. 身分証明書の名義人が、身分証明書の発行の日から一年以内に本邦を出国しない場合には、その一年を経過したとき。

b. 身分証明書の名義人が本邦に帰国したとき。

2. 効力を失つた身分証明書は本邦においては交付を受けた都道府県知事または内閣総理大臣に、南方地域においては南方連絡事務所の長に返納しなければならない。

3. 身分証明書を紛失し、または焼失した者は直ちに本邦においては交付を受けた都道府県知事または内閣総理大臣に、南方地域においては南方連絡事務所の長に届け出なければならない。届け出の後にその身分証明書を発見した場合においても、また、同様とする。

4. 身分証明書の交付を受けた者は、本邦を出国する前に必ず所定の予防接種を受け、予防接種済証を携行しなければならない。

身分証明書

日本政府
総理府

— 1 —　1222

写真

水野晴夫

名義人自署

— 2 —

第 513245 号

本証明書添付の写真及び説明事項に該当する日本人 水野晴夫 は訪問の目的で沖縄へ渡航するものであることを証明する。

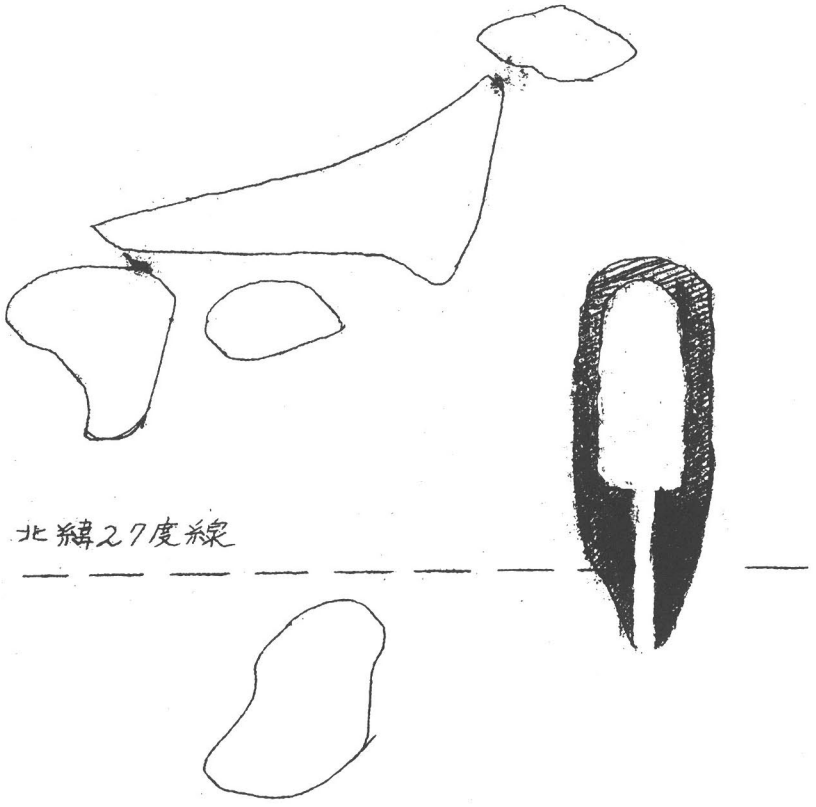
この証明書は本邦に帰国するまでの間有効である。

昭和 42年 2月 2日

内閣総理大臣 佐藤榮作

沖縄渡航に際し，日本政府より発行された身分証明書

沖縄県



編者：　一橋大学陸上競技部.
発行者：　一橋大学陸上競技部.
印刷所：　用務員室印刷工場.
発行所：　一橋大学陸上部出版局
誤字制造局：　●●●●●●●●●●？
誤字修正局：　○○○○○○○○○？

初版発行：昭和42年2月28日午後
1時09分27秒6
(箱根駅伝予選通過タイム)

途中省略：この間10秒7(東大に連勝

第55版発行：昭和42年2月28日午後
1時09分38秒3

筆者の了承により検印は省略
落丁.乱丁はお取り替えしませんぞ。

注意事項

一 規律に従い、一橋大学学生の誇りを持って行動すること。

一 集合から解散までを合宿とみなす。

一 合宿中は禁酒、禁煙を厳守。

一 沖縄合宿中は、原則として、班別で行動すること。

一 団体行動の際は、学生服着用のこと。

一 沖縄の人々と親しく話し合い、かつ認識を深めるよう努めること。

一 法規（免税 持ち込み等について）を厳守すること。

一 身分証明書、貴重品等には注意すること。（身分証明書の番号はひかえておくこと）

沖縄合宿風紀取締り委員会.

沖縄合宿行動予定

3/6	月	東京駅集合 ~~19:00~~ 18:30　出発 20:30(瀬戸)
7	火	神戸着 7:03 ～(出国手続 etc) 12:00発
8	水	
9	木	那覇着 10:00 ～琉大～ 軽い練習
10	金	午前・午後練習
11	土	
12	日	
13	月	
14	火	試合予定(未定)?
15	水	休養日 (未定)
16	木	午前・午後練習
17	金	
18	土	
19	日	早朝練習　自由行動
20	月	那覇発 12:00
21	火	
22	水	
23	木	神戸着 8:00

4月3日(月) 時 集合

会計，一人当り明細書

- 汽車賃　2,620円＋α円
- 船賃　7,300円
- 食費 ｛朝と夕　2,520円
  ｛昼　2,400円
- 雑費　900円
- 観光費等　β円

15,740円＋(α＋β)円

(α＋β)円は約2,500円位。
従って，以前に集めた7,300円の他に約2,500円位現地にて追徴収する故，十分，覚悟しておく事。

即ち 7,300円＋2,500円≒10,000円
かかるわけである。
他は先輩からの補助金でまかなう。

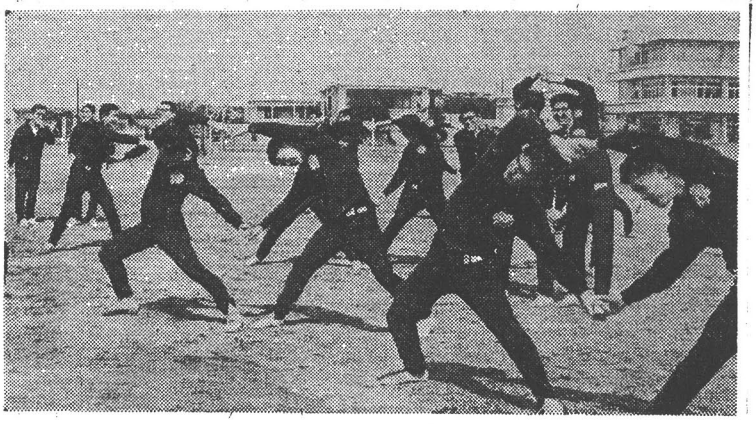
―以上―

一橋大学陸上競技部専属公認会計士

1967年3月11日　土曜日　沖縄タイムス

沖縄で合宿訓練

一橋大の陸上部員38人



琉大グラウンドで練習する一橋大学陸上部

一橋大学陸上の遠藤恒夫主将外三十八人が春季合宿のため九日来島、琉大武道場に宿をとって十日から十九日までの日程で合宿訓練にはいっている。遠藤主将は「毎年やっている春の合宿を暖かい沖縄でやり、心機一転をはかろうというのがきっかけ。それに地元の学生とも競技を通して友好を深めたい」というのが沖縄合宿の目的。

メンバーには今春卒業する四年生組も九人加わり後輩と最後の合宿をともにしている。

一橋大学は関東インターカレッジでは二部のグループ。これまで不振だったが昨年は総合で一躍六位に入賞した。そのほか東大との定期対抗競技でも十五年ぶりに勝ち、一橋、神戸、大阪市大（元三商大対抗）の競技会でもこのところ五連勝をつづけて好調の波にのっている。関東第一部への進出が当面の目標だと全員はりきっている。

主な選手は棒高とびの青木俊樹、ヤリ投げの松本正義、中距離の遠藤恒夫らがあげられる。青木は昨年棒高とびで4メートル40をとび全日本学生の五位にランクされている。松本の記録は66メートルでこれも全日本学生七位の成績。遠藤は三千メートル障害で9分24秒6の記録をマーク、全日本学生十六位のほか千五百もこなしている。しかし青木、松本はすぐ卒業、シーズンは遠藤がけん引車となる。合宿は午前中総合トレーニング、午後から種目別の強化訓練、後は技術面の意見交換となっている。

一行は滞在中に沖縄側三大学との親善競技会を行なう予定で、話をすすめている。

「1週間、共に頑張ろう、と笑顔で話す琉大、一橋大の両陸上部の選手たち＝琉大グラウンド

琉大―一橋大陸上部

交流重ねて30年

67年から来県

「春季キャンプの草分け」

復帰前の一九六七年から互いの技術力向上などを図ってきた琉大と一橋大（東京）の両陸上部の交流が今年で三十年目を迎えた。四年に一度の合同合宿。二十八日には一橋大が来県。節目の記念すべき年、と現役の学生のほかOBも加えて三十六人が訪れた。午後四時からはさっそく琉大グラウンドで練習、同夜には歓迎会を行い、親ぼくを深め合った。

一橋大が沖縄に訪れるようになったのは〝ご褒美〟がきっかけだった。六十六年、同大のビッグイベントだった三商科大学（東京、神戸、大阪）対抗戦で優勝。東大との対抗戦も数年ぶりに勝利を収めた。

「頑張った褒美にどこか地方で合宿をさせてやる」。監督らの一言で、まだ米軍統治下にあった「オキナワへ」の声が選手の間で沸き上がり、当時としては破格の百万円の補助を大学側から受けて実現した。

それから三十年。七十八年から一時、途切れた時期もあったが、「出会いを大事にしてきた結果、ずっと続いてきた」と言う琉大の山城康正監督。当時は県外から遠征合宿に訪れるチームはなく、「現在、各スポーツが春季キャンプ行うようになったのも、これが草分けになったと思う」と話した。

第一回の合同合宿に参加した一橋大OBの水野晴夫氏は「身分証明書を取りに行ったり、船で二泊かかったりと苦労も多かった。しかし、すごい歓迎を受けてとてもうれしかった」と振り返り、「あれからもう三十年か。これからも続いてもらいたい」と感慨深そうに語った。また同大OBで日本陸連財務委員会の阿部湘一郎委員長も選手を前に、「ここで合宿を行う、と、その年はいい結果がでる、というジンクスがある。頑張ってほしい」と激励した。

琉大、一橋大両陸上部の合同合宿は七日まで琉大グラウンドで行われ、長距離、短距離、フィールドと各パートに分かれて、練習を行う。

● 第2回 （昭和46年3月8日から3月24日まで）

沖縄遠征を契機として

主 将　金 氏 俊 郎

昨年の冬は，11月の半ばを待たずして，国立のグランドに霜が降り始めた。そして半ばを過ぎる頃には，早くも初氷の日を見るほどに寒さが厳しかった。一昨年は，風こそ冷たかったが，12月，そして年が明けてもグランドは乾いており，スパイクを使用して練習できたことを思い返しても，冬の訪れはいかにも早かった。

そこで，フィールドを使用しての球技，補強運動，また軟弱ながらも，ある程度トラックを走ることによって，寒く長い冬をじっくり基礎的な練習に費やした。

それより前，10月の半ば，我々9月の東大戦を境に4年生から役員を引き継いだ者が，吉見先輩を訪れた。一通り話が終ったところで，話題が4年前に挙行された沖縄遠征のことにうつった。ちょうど，当時主将であった遠藤先輩が同席されており，話は急速に進んだ。正直なところ，沖縄遠征を行うという雰囲気が，我々部員の中で充分に醸成されつつあったわけではなかった。しかしながら，その場で感じたことは，素晴らしい機会であるから是非実現したいということであった。

実現にあたっては，いろいろと各方面からの努力をお願いしなければならなかった。

4年前の遠征に際しては，琉球大学をはじめとする沖縄の関係者の全面的協力のもとに行われたという背景があった。今度も同様に，琉球大学をはじめとする多くの方々にたよらざるを得なかった。我々の勝手な要求に対して，我々の到着を楽しみに待っているとの暖い返事を石垣さん始め，琉大陸上部の方からいただき，実に有難いと思った。そして，その好意が本物であったということを，実際沖縄に行き，彼らと接した時に理解し得た。彼らの心づかいは，今でも我々一橋アスリートの胸の中に鮮明に残っている。

冬期練習で鍛えた身体を，暖い（というより暑い）沖縄で，疲れを恐れずに思う存分に動かしてきた。国立にいれば，寒いからといって，また，グランドが軟弱だからといってのんびり過ごしたかもしれないこの時期を本格的な練習をして過すことが出来た。しかしながら，我々は大いに感ずるところがあった。この合宿期間の半分を琉大の諸君と練習を共にした。我々には我々の練習の仕方，考え方があったにしろ，彼らの練習に圧

倒された。彼らの豊富な練習内容，真剣な練習態度に圧倒された。国立の緑に囲まれた美しいグランドにとじこもり，外へ出る機会の少なかった我々にとって大いに刺激となった。

沖縄から帰って，現在，津島さんという老コーチにご面倒をおかけしている。津島さんからも多くの刺激を受けている。同じやるなら，本物を目指したいと今更思った。単にわいわいがやがやの集団であってはならないと思った。毒にも薬にもならないことをやることほど無駄なことはないと思う。

今，こうして原稿を書いていると，琉大のグランドで練習を終え，寮の食堂へ向う時の情景，「動悸，息切れがする」などと，冗談を言いながら宿舎への長い石段を毎日登っていったことが思い返される。そして，その石段を登り下りする日もあとわずかとなった時には，沖縄の地に上陸して初めて琉大陸上部の人と話を交した時の戸惑いは，もはやうすらいでいたと思う。

最後に，今度の沖縄遠征に際して，多数の先輩諸兄の御助言，御協力本当に有難うございました。

沖縄合宿日程表

3. 6 (土) 12:00 東京港発「とうきょう丸」
7 (日)
8 (月) 17:00 那覇港着
9 (火) 午前練習 午後南部戦跡巡り
10 (水)
11 (木)
12 (金)
13 (土)
早朝，午後の2回練習
(夜 米軍体育館で室内陸上大会観戦)
(日月先輩来られる)
14 (日)
3. 15 (月) 中北部旅行
16 (火)
17 (水)
18 (木)
19 (金)
(日月先輩，4年生帰京)
早朝，午後の2回練習
20 (土) (遠藤先輩来られる)
3. 21 (日) グランド整備 午後練習
22 (月) 琉大と合同記念会
23 (火) 早朝練習 午後自由行動
24 (水) 12:00 「おとひめ丸」で那覇港発
25 (木) 9:30 鹿児島港着
急行「さくらじま」で神戸
26 (金) 7:20 神戸駅着 解散

沖縄合宿決算報告

収入の部	
先輩より寄附	800,000円
部員より徴収	380,000
その他	28,600
計	1,208,600円

支出の部	
船賃	374,980円
食費	135,504
宿泊費	55,200
バス代等	42,271.2
ミーティング経費	12,564
毛布代	7,560
先方へみやげ	5,000
謝礼	3,600
ペナント	2,000
本土へのみやげ	3,096
ポール送料	4,054
印紙代	12,160
写真代	11,820
検疫	5,910
その他雑費	27,094
両替による損金	1,019.8
計	703,833円
差引	504,767円

会計　林　利治
雪本寿嗣

沖縄遠征寄附金一覧表

氏名	寄附金	氏名	寄附金
水上達三	50,000	織田邦利	5,000
尾本信平	50,000	鈴川準二	5,000
山根春衛	30,000	松本正義	5,000
伊藤太一郎	30,000	水野晴夫	5,000
岡田梯三	30,000	山崎隆一郎	5,000
小林主	30,000	吉田輝夫	5,000
吉見泰二	30,000	吉田良造	5,000
石平一郎	30,000	遠藤恒夫	5,000
米沢義史	30,000	藤岡幹司	5,000
久保田才次郎	20,000	藤田伸夫	5,000
椎名時四郎	20,000	渡辺達也	5,000
加藤好三	20,000	徳島厳	5,000
金子珪亮	20,000	秋間幸男	5,000
新谷健市	20,000	池田隆弘	5,000
久留武	20,000	後藤哲也	5,000
松原美義	20,000	古明地康正	5,000
水野忠夫	20,000	堀勝彦	5,000
生田目輝夫	20,000	松田敏弘	5,000
横溝孝之	20,000	美和新一	5,000
神谷三雄	20,000	伊賀良郎	5,000
深川登代仲	20,000	望月和雄	5,000
立川恵造	20,000	吉村研一	5,000
中牟田研市	20,000	及川正己	5,000
柴沼富国	20,000	橋本善和	5,000
黒住忠行	20,000	久米増也	5,000
杉村壮一郎	20,000	鈴木仁	5,000
平野国松	10,000	永井一史	5,000
青木俊樹	5,000		
		以上 計	800,000円

（以上「ATHLETIK FREUND 1971 ―沖縄合宿特集号―」より収録）

● 第3回 （昭和49年3月16日から3月29日まで）

第3回沖縄合宿

主将　田島泰次

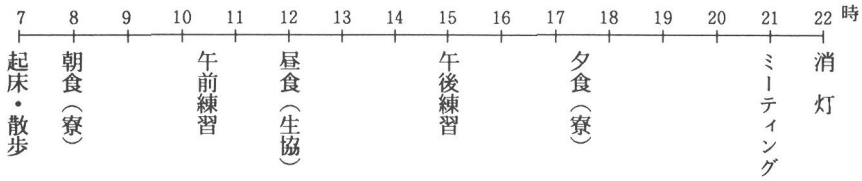
我々陸上競技部員33名は，3月16日から29日にかけて待望の沖縄合宿を行ないました。今回の沖縄合宿は，本来ならば4年に一度の合宿が1年繰り上がったことや，水上，尾本，吉見の3先輩の御寄贈による新しいユニフォームと練習旗，久留先輩の御寄贈による新しいトレーニング・ウェアなどを初めとして，先輩の皆様方から多大な御支援を頂いたことなど，先輩方の並々ならぬ期待の大きさを感じました。一方，沖縄では琉大OBの石垣さんに，合宿所や毛布の準備，練習場の確保などと，何から何まで御世話になり，石垣さんにはいくら感謝してもし尽くせない気がします。また琉大ばかりでなく，沖大や国際大の皆さんまでが，毛布集めに奔走して下さり，その暖かい持てなしに感謝しました。こうした恵まれすぎるほどの条件に加えて，晴れた日の沖縄は陽射しが強く，爽やかな海風が吹いて快適この上なく，練習には絶好のコンディションになりました。あいにく合宿の前半は，沖縄の天候はいつになく不順で雨の日が続きましたが，これも屋内練習場のある奥武山競技場を使用することができたため，何の支障もありませんでした。このすばらしい環境の下で我々の練習にも熱が入り，皆かなりのハードスケジュールを無事こなすことができました。

ただ心残りなのは，琉大陸上部の八重山合宿と時期が重なったため，琉大の皆さんと殆んど一緒に練習できなかったことです。このため両部員間の交流も少なくなりがちでしたが，これも最終日のバス旅行と野外合同コンパで少なからず埋め合せできたようです。あの焚き火を囲んでのコンパは，あの泡盛の味とともに，私の忘れ得ぬ沖縄の思い出となりそうです。

最後になりましたが，お忙しい中，沖縄まで同行して下さった水野，金氏の両先輩に心から御礼申し上げます。そしてこの沖縄合宿が陸上部の発展に寄与し，後輩のために今後とも長く続くことを期待してやみません。

第３次沖縄合宿全日程（1974・3）

14（木）10時　　東京駅発（東京集合者）
　　＜急行「桜島」＞
15（金）11時43分　　西鹿児島駅着
　　14時　　同駅表口集合（鹿児島集合者も）
　　＜バスで鹿児島新港へ＞
　　17時　　鹿児島新港発
　　＜琉球海運「とうきょう丸＞
16（土）13時　　那覇港着
　　（先発隊水野晴夫先輩・渡辺・浜田と合流）
　　＜バスで琉大男子寮へ＞
　　（青木副将以下３名はひめゆりの塔に花を献げる。）
　　17時　　琉大主催歓迎ミーティング
17（日）練 習 日 ＜練習開始＞



18（月）練 習 日
19（火）　〃
20（水）　〃
21（木）休 養 日
　　（休養日は朝食後，夕食前までが自由）
22（金）練 習 日
23（土）練 習 日（午前のみ全体で，午後任意）
　　金氏先輩来られる。
24（日）一橋親善陸上記録会（奥武山競技場）
　　（沖縄大・沖縄国際大・一般・中高生と親善記録会）
25（月）休 養 日
26（火）練 習 日
27（水）　〃
28（木）　〃　＜練習終了＞
29（金）（一橋33名と琉大５名で）
　　19時　　送別ミーティング
30（土）10時　　寮出発
　　＜バスで那覇港へ＞
　　12時30分　　那覇港発
　　＜琉球海運「とうきょう丸」＞
31（日）8時　　鹿児島新港着 ＜解　散＞

沖縄合宿決算報告

Ⅰ）収入の部	
1. 学生より	333,330円
2. OB寄附	1,654,000円
3. その他	
(1) つかさ寿司より	10,000
(2) リッカーミシン陸上部	20,000
(3) 銀行利息(税引)	296
小計	30,296円
収入の部合計	◎ 2,017,626円
Ⅱ）支出の部	
1. 往復旅費	
(1) 国鉄運賃	58,690
(2) 船賃	206,420
(3) 船中食費	93,250
(4) 用具等運搬費	11,240
小計	369,600円
2. 合宿経費	
(1) 宿泊費(寮維持費)	3,060
(2) 食費	205,020
(3) 毛布代	18,200
(4) 島内交通費	34,770
(5) 奥武山競技場使用料	3,210
小計	264,260円
3. その他	
(1) ミーティング費	15,000
(2) バス旅行費	64,600
(3) ペナント代	1,120
(4) 先方へのみやげ	11,640
(5) 謝礼	6,250
(6) 本土へのみやげ	19,200
(7) 通信費	11,020
(8) 写真・アルバム代	23,945
(9) OB参加費(2名)	100,000
(10) ユニフォーム整備代	15,000
(11) OB回り費	18,830
(12) 保険代	28,215
(13) その他雑費	24,109
小計	338,929円
4. ATHLETIK FREUND 沖縄号(予定)	100,000円
支出の部合計	◎ 1,072,789円
Ⅲ）差引残高	◎ 944,837円

☆　御寄附いただいた先輩有志の方々

大10卒	山根	春衛
14	寺尾	一郎
15	猪瀬	弁一郎
昭 3卒	水上	達三
4	吉次	利二
〃	椎名	時四郎
〃	垣添	秋三
昭 5卒	相馬	勝夫
〃	田部	文一郎
6	岡田	悌蔵
7	富岡	八十雄
8	尾本	信平
〃	米沢	義史
9	石	平一郎
昭 9卒	金子	珪亮
10	久保田	才次郎
〃	小林	主
〃	新谷	健市
〃	平野	国松
11	松原	美義
〃	吉見	泰二
12	水野	忠夫
〃	生田目	輝夫
13	横溝	孝之
14	深川	登代仲
16	中牟田	研市
〃	柴沼	富国
〃	久留	武
〃	東内	良雄
17	黒住	忠行
18	杉村	壮一郎
24	星野	惣次
25	高橋	保
昭26卒	山本	省吾
〃	真壁	拓也
27	辰野	康夫
28	渋谷	鋭市
29	阿部	湘一郎
昭30卒	滝	泰之
31	山口	明
32	竹田	英俊
34	角	孝之
〃	相馬	正之
35	最上	義範
36	金谷	浩介
〃	古高	昇
37	原田	彰三
38	内藤	藤三
39	漆山	浩一
〃	林	龍介
40	鶴尾	勝
41	日月	雅昭
42	青木	俊樹
〃	織田	邦利
〃	鈴川	準二
〃	松本	正義
〃	水野	晴夫
〃	山崎	隆一郎
〃	吉田	輝夫
〃	吉田	良造
43	梅原	肇
〃	遠藤	恒夫
昭43卒	藤岡	幹司
〃	藤田	伸夫
〃	渡辺	達也
44	徳島	厳

昭44卒	秋	間	幸	男
〃	池	田	隆	弘
〃	後	藤	哲	也
〃	古明地		康	正
〃	笠	原	高	治
〃	鈴	木	貞	一
〃	堀		勝	彦
〃	松	田	敏	弘
〃	伊	賀	良	郎
〃	望	月	和	雄
〃	美	和	新	一
〃	山	本	淳	一
〃	吉	村	研	一
45	秋	山	俊	之
〃	及	川	正	己
〃	橋	本	善	和
〃	久	米	増	也
〃	松	本	行	央
〃	鈴	木		仁
〃	永	井	一	央
昭46卒	浅	井	勝	美
〃	相	川	晃	一
〃	安	藤	憲一	郎
〃	岩	瀬	浩	一
〃	河	村		浩

昭46卒	幾	石		純
〃	平	田	由	夫
〃	浜	田		愃
〃	藤	沢	隆	雄
〃	藤	田	孝	一
〃	松	井		弘
〃	横	山	宗	永
47	浅	倉	栄	郎
〃	稲	岡	作	人
〃	江	口		勲
〃	金	氏	俊	郎
〃	坂	田	藤	男
〃	佐	藤		彰
〃	中	島		茂
〃	中	村		明
〃	林		利	治
〃	柳	沢	民	雄
〃	雪	本	寿	嗣
48	石	本	賢太	郎
〃	柴	沼	和	広
〃	建	部	克	史
〃	塚	越	芳	男
〃	築	野	俊	雄
〃	原		秀	男
〃	森	田	裕	二

（会計　森本　　健）

（以上「ATHLETIK FREUND 1974
―沖縄合宿特集号―」より収録）

東　京　駅　3月14日

お見送りの吉見先輩（中央）と
田島主将（左），青木副将（右）

練習を終えて　3月28日

奥武山陸上競技場にて

● 第4回 （昭和53年3月8日から3月23日まで）

沖　縄　合　宿

3　年　　高　崎　真　治

今年度の春合宿は，OB会からの多大なる御支援のもと，遠路沖縄で行なった。5年ぶりの沖縄合宿ということで，OB会の方々，或いは，琉球大学の関係者の方々には，たいへんな御尽力を賜わり，現役部員一同，感謝致しております。

今年度の沖縄合宿は，昨年度末に計画され，中村主将をはじめとする4年生が中心になって，綿密な計画のもとに，3月8日から23日までの2週間にわたって行われました。我々現役部員は，沖縄合宿に先立って，例年とは異なり，春休み返上という形で3月1日に集合し，中村主将の練習計画のもと，出発前一週間を，合宿前の強化練習及び調整の期間にあて，万全の態勢で沖縄合宿に臨みました。

3月8日夜に羽田を発ち，その日のうちに沖縄入りし，合宿にはいったわけです。宿舎は，琉球大学男子寮の2部屋を借り，琉球大学の方で寝具を用意していただき，2週間の沖縄での生活を何とか乗り切ることができました。南国沖縄は，さすがに暖かく，5月中旬ぐらいの気温で，練習にはちょうどいいコンディションでした。ただ，3月の沖縄は，雨が多く，2週間のうち雨の降らなかった日は5日程度で，当初の練習計画を，十分にこなすことができなかったことが唯一残念なことでした。練習は原則として午前，午後の2回行ない，3日練習1日休養という形をとりました。練習場所は，当初，琉球大学のグランドで行なう予定でしたが，先に書いたように，雨にたたられて，ほとんどを那覇市内にある県営の奥武山陸上競技場で行ないました。練習は各パート毎に，合宿前にたてた計画に基づいて行われましたが，雨のため当初予想していたほどの走り込みが行えず，全体として，走り込みと補強運動が半々という割合になってしまいました。休養日には，各自フリーということで，練習に差しつかえない程度に，それぞれ外出し，つかの間の観光気分に浸ることができ，また，最後の休養日には全員でバス旅行をして，部員相互の親睦をはかることができました。

次に，沖縄合宿全体を通しての雑感を書いてみると，まず，2週間という長期の合宿のため，練習計画作成の際に，どの程度の練習を組めばいいのか知識が不十分であり，

また，現地の気候を調べずに行ったので，練習計画に大幅な変更があり，練習に関する上での多少の予想ミスがあったこと，それから，気候の変化により，体調をくずすものや，事前の調整がまずく，故障を起こすものが数名出たのは，合宿へのコンディションづくりのミスであったと思う。また，沖縄合宿の当初の目的は，インカレ等に備えて，シーズンインを早くすることであったのだが，これは，３月下旬から４月にかけての学連クラス別記録会での好記録の続出から見て，十分な成果があったのではないかと思う。また記録や練習以外では，２週間という長期の合宿生活により部員相互の親密度も増し，部全体のまとまりという点では，好結果を生んだと思う。それから，普段交流のない琉球大学の方々と親睦を深めることができたのは，いろいろといい思い出になったと思う。ほかにもまだあるのですが，以上が私の沖縄合宿に関する雑感である。

最後に，沖縄合宿に際しましては，ＯＢ会の方々から，あるいは若手のＯＢの方々から多大なる御援助をいただき，また，吉見・水野両先輩には，わざわざ沖縄まで激励に来ていただき，現役部員一同，たいへん感謝しております。また，琉球大学の方では，石垣先輩，山城先生，琉球大学陸上部員の方々など，我々の遠征に際して多大なる御尽力を賜わり，また，我々一行を盛大に歓迎していただき，本当にありがとうございました。書面で失礼とは思いますが，現役部員一同に代わりまして，お礼を申し上げます。

（以上「ATHLETIK FREUND 1978」より収録）

昭和53年3月，広島カープ／江夏豊投手を
囲んでの，短距離，跳躍チーム

奥武山陸上競技場にて

● 第5回 （昭和元年3月10日から3月17日まで）

沖縄合宿の意義

阿　部　湘一郎
（昭和29年卒）

昭和41年に三商大戦の5連覇成り，更に昭和28年以来負け続けていた東大戦に念願の勝利を果たした，というのが直接の理由だったと思うが，故吉見先輩の発案で昭和42年3月初の沖縄合宿が実現した。それから20数年，昨年の三商大戦で16年振りに優勝したのを機会に，平成元年3月沖縄合宿を行うことになった。昭和53年以来11年間の中断後スムーズに再開できたのは，琉球大学の山城先生（元陸上競技部々長）と水野晴夫君の永年に亘る付き合いのおかげであり，ここに両氏に深く感謝する次第である。

さて，沖縄合宿の意義については倶楽部員夫々考え方があろうが，復活を機に私なりの考え方を述べさせて頂き度い。先ずシーズン前に温暖の地で合宿を行い，体調を整えて来るべきシーズンにおける各人の記録の向上，或いは各対抗戦の勝利に向けての発進準備という意味で，一般論としては誰しも納得できるところであろうが，問題はその為に沖縄が最適なのか或はそこ迄コストをかける必要があるのかといった議論が生じる余地があろう。しかし，一寸飛躍するが，この春の合宿を陸上競技という狭い範囲での功罪からのみ論ずるのは如何なものであろうか。所詮人間社会は人対人の付き合いを基礎に成立しているものであり，その限りにおいて1人でも多くの人，然も異なった環境に育った人達と知り合うことが如何に自分の世界を拡げてくれるものか論を俟たない。大学の先輩・後輩といった特定集団内の人々との交流，更に利害関係を共有する人達との交流の他に，全く異質な社会に住み然も趣味を共にする人との交流は人生を非常に豊かにしてくれるものである。こう考えてくると，4年に一度（学生にとっては在学中1回だけ）ではあるが，この沖縄合宿は学生にとって大袈裟に言えば，人生に何らかのインパクトを与えるような人との交流が期待できる得難いチャンスでもある。学生の部活動を援助する目的は第一義には部員の好記録，部の強化にあるが，沖縄合宿については以上述べたように，人との出合いを大事にし人生を豊かにするための一手段という第二義的目的を付け加えたい。

閑話休題。かくて独断ではあるが学生諸君に対し沖縄向け出発前に右の主旨を話すと共に，3月10日琉大グランドへ水野君と共に赴き，山城先生，琉大OBの方々及び学生諸君に同様の話をし，その観点から今後とも一橋陸上競技部の交流を深めてゆきたいと申し述べたところ，皆さんから御賛同を頂いた。そして現在迄山城先生と私・水野君の交流が続いている。

後日談。

1. 合宿時点の主将だった松本君が，夏休みに沖縄旅行を企て，山城先生を訪ね先方部員とも歓談して来た由，山城先生から喜びに溢れた便りを頂いた。
2. 11月末頃山城先生が学会で来京された。その時在京の琉大陸上競技部OB会を開くので参加しませんかという御招待を頂き，水野君と共に出席，新宿の居酒屋で夜遅くまで歓談した。総勢7・8名であったが琉大OBから，来年から一橋対抗戦には応援に行こうという話にまで発展した。嬉しい限りである。今後とも人との出合いを大切にし，琉大との交流を深めてゆきたいと考えている昨今である。

沖縄に行って

4年　松本勝男

ことの起こりは，88年7月の三商大戦での優勝であった。10数年ぶりの優勝であり，また，最終種目のリレーで勝負が決定したこともあって，まことに劇的であり，かつ感激的であった。前々からOBの方々に，「三商に勝てば，海外遠征だぞ。」とハッパをかけられていたこともあり，優勝が決まった時に，「やった!!　ニュージーランドだ」と叫んだ輩もいた。海外遠征は，まあ冗談としても，記念の年として，何かしらOB会との間で，1つ新たな行事のようなものを行う機運がもち上がった。

我がクラブは，20年ほど前までは，春合宿を沖縄で行っていたという経緯もあり，沖縄合宿をやってみたらどうか，という話になった。しかし，なかなか実際の話となると，スムーズにというわけにはいかなかった。1つ上の先輩方からは，せっかく多大の経費をまわしてくれるのだから，何か，器具などの充実のために使ったらどうか，という助言をいただいた。また，3月の沖縄は雨が多いので，合宿の内容がとぼしくなるのでは，という不安を述べる者もあった。だが自分の心には，今年は1つの契機として，

何か新しいことを試みるべきではないか，また，単にOBからの御ほうびではなくて，自分達の競技力を実質的に伸ばせるような機会として活動できるものがよいのではないか，そして，対校戦以外では他校との交流のない我がクラブには，他の学校と友好的に交流できる場が必要なのではないか，といったような考えがあり，この沖縄合宿は，それらを満たすよい案であると思い，その実現を積極的に望んだ。

この実現での過程では，多数の人に御尽力をいただいた。とくに幹事長の阿部さん，OBの水野さんには，琉球大学とのかけ橋となっていただき，琉大の情報をたくさん提供していただいた。また琉大の山城先生には，東京でわざわざお会いしていただく場をもうけていただいた。お酒が強く，気さくで明るい先生を拝見して，こりゃ合宿は面白くなるぞと期待もふくらんだ。そして合宿係の大竹，琉大の岩崎には，細かい打ち合わせを行ってもらい，非常に助かった。この2人に負うところは，はなはだ大きかったと言える。

フタを開けてみると，沖縄合宿は本当によかった。行った日に焼肉パーティーを開いてもらったり，休憩時間に海へ連れて行ってもらったり，琉大の人の心づかいには，全く頭が下がる思いであった。心配された雨もなく，沖縄の街は自分達には目新しく，あっという間に期間は過ぎていった。最後の打ち上げなどは，琉大の人達が強さを爆発させ，我々一橋は，完ぷなきまでたたきのめされたのであった。OBの方々も一緒に輪を作り，今思い出しても，本当に楽しいひとときだった。自分の口に，「吐いたほうが楽ですよ。」と右手をつっこんだ岩崎の心配りは一生忘れねえ。

合宿中に留意したことは，この合宿は単なる遊びではない，沖縄には観光に来たのではなく，陸上をやりにきたのだ，ということを常に念頭に置くことであった。その真偽のほどは，5月のインカレの結果が，そして個々の記録のアップが，それを如実に証明していると確信している。そして，その別の意味での成果は，現在でも個々の間で文通などがあることをみれば，明らかであるといえよう。

最後に，後輩のみんな，せっかく始めたこの機会をどうか，続けて下さい。4年に一ぺんかもしれないけれど，思い出は一生続くのです。そして，今度はこちらが琉大の人達のお世話をする番なのです。自分達が受けた心づかいをその倍にして，かえして上げて下さい。よろしくお願い申し上げます。

それでは，この沖縄合宿の実現に努力をして下さった方々，とくに，琉大の現役諸君

に厚くお礼を申し上げて，筆をおくことにします。本当にありがとうございました。

P・S　山城先生，また飲みましょう。

（以上「ATHLETIK FREUND 1989
―沖縄合宿特集号―」より収録）

3月17日　那覇空港にて

女性部員誕生

女性部員誕生

国立のグランドに行くと，女性部員の多さに驚ろかれる方が多いと思う。在校生に占める女子学生の比率が15％を超える昨今では，特に驚くことではないかも知れない。

初めての女性部員で，現在経済学者（政策研究大学院大学助教授）として活躍されている大田弘子さん（昭和51年卒）に入部のいきさつ等につき語って頂いた。

他校女子部員の経緯

中　村　龍太郎
（昭和54年卒）

昭和50年春，津田塾大学に入学した清水嬢は，陸上競技経験者であった。しかしながら，同大学に陸上競技部が存在していなかったので，静岡の清水東高校の時に陸上部の先輩であった大石一夫氏（昭和53年卒）を頼って，一橋で一緒に練習をしたい旨の要請があったことが他校女子部員の始まりである。当時の４年生が協議のうえ，同好の士として一緒に練習することを認めたもので，その後津田塾の後輩に陸上競技部入部希望者が続き，他校女子部員が続くこととなったのである。

因みに，大田弘子さん（昭和51年卒）以降女子部員が徐々に増え，平成元年度は，他校部員も含め13名（総部員の24.5％）の女子部員が在籍していた。

紅　一　点

大　田　弘　子
（昭和51年卒）

私は，陸上部の初めての女子部員です。入部の動機はしごく簡単で，一橋の女子学生が少なすぎたために一人で出来るスポーツを選ばざるを得なかったから。その頃の男子部員は40～50名だったでしょうか。皆さん大事にしてくれたので，唯一の女子ということで不自由や心細さを感じたことは全然ありません。その後，社会に出てからも紅一点という場面は非常に多いのですが，学生時代の経験からか紅一点を快感と思う悪い癖がついてしまった(?)。

練習も合宿も男子部員とまったく一緒。授業にはほとんど出ませんでしたが，国立のグランドには毎日のように行きました。更衣室は，狭い道具置き場。部員１名では陸連への登録もできず，津田塾大から隠れ部員を引っ張ってきたりしました。そもそも大学で陸上をやっている女性は体育学部にしかおらず，国立では筑波大と学芸大だけ。弱い私も，国公立戦では３位に輝くことが出来たのです。

さて，当時のコンパは春歌の大合唱。紅一点の登場で先輩方は一瞬ためらった様子でしたが，すぐに無視するという結論をお出しになったようです。私も18歳の娘らしく頬を赤らめるふりをしたものの，いつのまにか手拍子を打っていました。お酒も豪快で，自己記録を出した部員は大きな寿司桶にビール＆日本酒＆ウィスキーを注ぎ込まれ，一気飲みさせられるなんていうことが行われていました。この時ばかりは，女で良かったとしみじみ思ったものです。こういうコンパに鍛えられた者にとっては，最近の大学生のコンパは実にものたりない。「先生は強いですね」なんて今どきの若い子に褒められています。

陸上の練習では女を意識することはなくても，就職の季節になると，とたんに男性と歴然たる差を見せつけられます。当時，一橋の女子学生は企業の指定校にはいっておらず，まして自宅通勤でない私には門戸は閉ざされていました。男子部員は引く手あまたなのに，私はまったくヒマ。他の同期生と道はあまりに異なり，流れ旅のあげくに何と大学教師におさまってしまった次第です。

卒業以来，運動から遠ざかっていますが，40代半ばにさしかかって，体脂肪率を減

らすべく一念発起。週2回のダンスのレッスンと毎日1200歩のウォーキングを始めました。たかがダンスやウォーキングとあなどるなかれ，いつしか足の筋肉が鍛えられ，地鶏のごとくなってきました。人間の体はいくつになってもそれなりに伸びるものですね。しかし，それも若いときに素地が出来ていたからのこと。私の本業である経済学は，若いときに素地をつくらなかったためにひどく苦労しています。頭でも体でもどちらでもいいから，学生時代に鍛えておけばすごい財産になると，この頃つくづく思います。

OBアンケート

＝陸上競技生活についてＯＢの皆さんにアンケート＝

今回の陸上競技部史（第２部）を編集するにあたり，ＯＢの皆さんに，学生生活の一コマや卒業後の陸上競技との関わりについてお尋ねするアンケートを実施しました。

それぞれの時代で，競技に打ち込まれた姿を思い起こさせる様なお答えを多数頂きました。これを読んで，当時の事を思い出す一助にして頂くとともに，今なお鍛練されている方には，励みにして頂ければと思います。

（テーマ①）国立周辺で，アフター・クラブのお気に入りだった場所のご紹介をお願いします。

- **酒・麻雀などの席でのエピソード**
- **お気に入りのメニュー**
- **当時の国立の街の様子　……等を書いて頂いても結構です。**

＊クラシック喫茶「ジュピター」　矢　島　一　孝（S38）

午前中の授業を終えて，午後3時半からの練習までが，クラシック喫茶「ジュピター」での日課であった。多くの曲をリクエストしたが，最もよく聴いたのは，シューベルトのハ長調の交響曲であったろうか。

＊万寿山・パブサン　中　川　正　彦（S53）

晩飯なら万寿山の回鍋肉。練習のあとで大石君とよく食べた。酒ならパブサンか。1000円でカクテルが何杯も飲めた。つまみを頼むと袋ごと出てきたことを覚えている。坊主頭のマスターは今どこで何をしているだろう。

＊テキサス　深　澤　　豊（S59）

国立の思い出の店といえば，入部初日に早川主将に連れていっていただいた「テキサス」でしょうか。とにかく空腹を満たしてくれた草鞋のようなステーキと辛いメキシカンサラダのあの店，今でも繁盛しているのでしょうか。

＊部員が良く利用した二次会・三次会の店　田　中　茂　夫（S60）

―スペイン，キャプテン……

その他，名前は思い出せないのですが，

— ステーキハウス「テキサス」の上のPUB

— ダンキンドーナツ向かいで自転車屋が1Fにあるビルの2FのPUB

— 一度火事になり改装，火災保険金目当てに自ら放火したのでは無いかと部員で疑った駅前の焼き鳥屋

— 東校舎沿い北側の通りと旭通りの交差点，角地にあった居酒屋

＊スタミナ丼　　門村慎司（S61）

懐かしいのは，通称「スタ丼」である。値段は当時500円ぐらいで，ご飯の上に焼き肉，海苔，生卵の載ったものだったが，大盛り（ご飯が3合以上ある：残すと罰金）に挑戦してよく空腹を満たしたものである。

＊ゑびす・とむ　　日渡　淳（S62）

壁にゴキブリが這っている様な所だけど，とにかく広くて安かった「ゑびす」。餃子と〆さばがおいしくて，帰る時は必ずマスターが握手をしてくれた「とむ」。どちらも既になくなっているのは寂しい限りです。

（テーマ②）思い出に残るレース・パフォーマンス（自分が出場したもの，他の人が出場したものは問いません）を1つ挙げて，その時の様子をご紹介下さい。

＊「一橋大学　ヨコヒラクン」　　横手英毅（S37）

昭和36年4月29～30日，国立競技場で東京選手権の十種競技に神谷君と私が参加した。

参加者6名中には元日本記録保持者の香月等も居りレベルが全く違うし，取り組んだこともない種目が，半分以上もある。又，2人共知らないうちにキャプテンの原田が登録したので，最初から気が進まなかった。折を見て棄権しようと話し合っているうち1日目が終わった。私は走幅跳で足首が捻挫状態で2日目の最初の110Hで棄権する予定だった。ところがこの110Hで私が勝ってテープを切ったのである。その途端，足の痛みも感じなくなり，十種は実に楽しいという気持に変わった。2日目の最終1500mを終えた時，疲労困憊状態であったが，満足感一杯であった。

賞状は6位まで出たので，当時，陸連の会長村木先輩より，私と神谷君

が5位・6位の賞状をニコニコ笑いながら手渡された。この時，私は「横平」という名が登録されて居り，2日間にわたり競技の初めと結果の紹介に，「一橋大学ヨコヒラクン」と放送されたのである。

今でも苦しい時は，この「ヨコヒラクン」を想い出して励みにしています。

＊松本君のデビュー戦　　天　野　智　臣（S39）

槍投の学内記録を持つ松本君は1年生のとき，国公立戦で公式戦にデビューした（その日，天野は不覚にもカゼで欠場）。松本君は，サポーターを忘れて出場できないというので，自分のを貸して無理矢理出場させた。彼は持前の強肩を発揮して，見事に入賞。

その後も，変調なく健康で，大いに活躍した。

＊東大戦15連敗を阻止　　水　野　晴　夫（S42）

昭和41年秋の東大戦で800ｍＲのアンカーを務め，見事東大を振切り15連敗を阻止した。ゴール後思いきりバトンを空高くほおり投げ，浜田君と抱き合ったことは今でも鮮明に想い出される。

＊「足音が聞こえなかった」　　藤　岡　幹　司（S43）

昭和42年10月国立での東大戦110ｍＨ，相手は伊藤君。実に気持ちのよいスタートを切って独走。迫られる気配を感じないままゴール。記録は所期に及ばず，対抗戦は僅差で負けたが，試合後，胸を張って言い放った。

＊1967年三商大戦　　池　田　隆　弘（S44）

1967年三商大戦。王子陸上競技場は大雨。トラックは足首まで水浸し。懇親会場に崩れ落ちた土砂で食べ物はオジャン。宿舎への帰りの坂道は濁流となりマンホールの穴に危く落ち込みそうになった者もいた。

＊昭和46年名大戦　　青　木　則　夫（S50）

1年生の昭和46年10月に名古屋大学との対抗戦1500ｍで4′15″3で優勝したことが思い出深い。それは(i)本対抗戦の第一回目の第一種目であったこと，(ii)1200ｍまで3位をキープし，ラスト300ｍ地点のスパートで勝つという理想的なレース展開であったこと，(iii)入部以来三商大戦1500ｍ，東大戦1500ｍ・800ｍといずれも2位に終った後であったことが挙げられる。

＊思い出に残る試合　　寺　田　恭　典（S53）

昭和52年5月15日，関東I. C. 予選2日目。立川市営競技場は，朝から小雨模様。その日予選最後の種目となる1600ｍＲの時には，天候は最悪になりドシャ降りの中，グランドは田んぼをかき回したようにぬかるみ状態であった。我が一橋は，抜きつ抜かれつ泥んこになりながら予選通過。その直後の組に東大が出場。ベストメンバーで臨み，アンカー主将佐々木君の時にハプニングが！第3コーナーを前に腕振りがおかしくなった。右手はバトン，左手はランパンの上を押さえて走っている。一瞬どうしたのかわからなかったが，周りがざわついている。どうもランパンのゴム紐が切れて，落ちるのを防いで走っている様子だ。それでも圧倒的に2位を離して悠々1位でゴール。その1週間後，決勝で東大は優勝し，一部昇格へ，我が一橋勢も例年になく20点という高得点を挙げ，9位を獲得した。

＊関東インカレ400ｍＲ　　川　幡　雅　宏（S54）

昭和53年度関東I. C. 400ｍＲは準決で42秒55の学内記録。決勝は「優勝をねらうしかないから思い切って引っ張ってくれ」と陶山君に言って痛恨のバトンミス。今でも忘れられません。

＊思い出に残るレース　　秋　山　寿　彦（S54）

昭和52年大阪万博記念競技場で行われた三商大戦5000ｍの時のことです。レースは4000ｍまでややスローペースで進みました。しかし4000ｍ通過と同時に大阪市大と神戸大の2人が猛然とスパート，私も離されまいと何とかついて行きました。ラスト1周の鐘が鳴った時に思いもよらぬことが起こりました。前を行く神戸大の選手が，1周勘違いして走るのをやめてしまったのです。私は一瞬唖然としましたが，大阪市大の選手を追って必死に走りました。結局，優勝は大阪市大の辻谷選手で，私は2位でした。走るのをやめた神戸大の選手が，思い直してしぶしぶ1周走り，ゴールした姿が印象に残ってます。

＊関東インカレ　　西　　康　宏（S57）

大学時代の最も印象深いレースは関東インカレ二部の400ｍ決勝。3年生の時はラスト10ｍで逆転され3位，4年生の時は最後の一歩で逆転さ

れ2位と，悲しいかな勝利の女神に見放されたレースでした。

＊P・Vの思い出　　門　村　慎　司（S61）

4年の名大戦は，正選手としてP・Vに挑戦した。専門の中距離の合間を縫っての参加で1500ｍのレースの後，疲れから2ｍ40，2ｍ60を3回目でやっとクリアし，2ｍ80，3ｍ00を2回目でクリア，ここで800ｍのレースのため棄権となったが，異系列種目の対抗戦兼任としては珍しいのではないだろうか。

（テーマ③）一昨年，取り壊された部室について。思い出に残るエピソードがあれば，ご紹介お願いします。

＊回覧ノート　　中　野　則　行（S61）

各パート内でノートを回して，練習内容や記録をメインに，大学生活での諸々をも書き綴る伝統があった。ノートは部室1階のキャビネットに保管していたが，新部室でも先人の軌跡として読み継がれているのだろうか。

（テーマ④）合宿について，思い出に残るエピソードがあればご紹介お願いします。

＊永遠の友　　織　田　邦　利（S42）

一緒に走った仲間は永遠の友である。走姿，息遣い，ゴールの顔，皆鮮明に憶えている。名簿に残る諸氏は勿論，一時にしても活動を共にした大野純一，荻野和仁，岡本行夫の諸君は特に思い出深い。部誌の奥深さである。

＊検見川合宿の思い出　　徳　島　　巌（S44）

箱根の予選が検見川になり，同地で合宿するようになった。カントリーコースでの周回や登りダッシュなど，30㎞ロード練習で目の前が黄色くなったこと，復路の角を左折して最後の登りにあえいだことなど思い出す。

＊検見川合宿　　鈴　木　　仁（S45）

箱根駅伝予選が行われた検見川で，合宿も行われた。起伏の多いコースで，練習もハード，特に30㎞走はきつかった。合宿部屋内に吊り下げられた多くの薄汚れた洗濯物の下で語り合ったのが想い出される。

＊富士見合宿　　日　渡　　淳（S62）

富士見高原の夏合宿。練習はきつかったけど，中日のパターゴルフ大会は楽しみだった。我が中長パートは不器用な人が多く，スコアメイクに苦労したが，他のパートには，パターゴルフである事を忘れ，フルスイングする人も多かった。

（テーマ⑤）ＯＢになってからも，競技を続けている方へ。記録やエピソードのご紹介をお願いします。

＊オール三井　　水　野　晴　夫（S42）

卒業後の翌年６月東府中の物産グランドで開催されたオール三井陸上競技大会100ｍで，アジア大会候補選手である長谷川君（三井銀行・慶應大卒）に引っ張られ，自己ベストの10秒9をマークすることができた。もっともこの大会は公認試合ではない。

＊仕事を通じての縁　　織　田　邦　利（S42）

卒業後10年は会社（明治乳業）の駅伝を応援し，ウォーキング大会等への参加，協賛は今も続けている。マラソンの有森裕子，鈴木博美，高橋尚子をはじめ一流選手の給水ドリンク（ヴァーム）の開発と販売も私の仕事であり，陸上競技とは縁が切れない。

＊マスターズ九州大会　　池　田　隆　弘（S44）

福岡勤務時，マスターズの資格（40才）を得，九州大会に参加。100ｍ13秒1，200ｍ26秒7，400ｍ64秒5。子供から「お父さんはいつもビリ」と笑われながら３年続けて出たが，肉離れを起こして後，週1，2回のジョギングのみとなっている。

＊ＯＢで駅伝出場中　　後　藤　哲　也（S44）

数年前から，千代田区駅伝（２月・皇居）と東日本国際駅伝（10月・相模原）に中高年ＯＢ主体で出場中。常連は鈴川（42），美和（44），池田（44），柿沼（44・途中退部），後藤（44），鈴木（45），幾石（46），坂田（47），建部（48），松原（57），山下（58）の面々。

97年の千代田区駅伝では，遠藤（43・10000ｍ学内記録者），松原（5000ｍ

学内記録者)，山下(1500 m 学内記録者)の3人がメンバーに入ったドリームチームが実現！

合同練習は月1回，神田の風呂屋に集合→皇居周回→入浴→ビール，を数年前から続行中。

～毎年続け，70才台の駅伝チームを一橋陸上部OBで編成しよう！～

＊卒業後も競技を続けていた御陰で，以下の貴重な体験

後　藤　哲　也(S44)

- 昭和45年の東日本実業団選手権の雨中の10000 m 決勝。かの有名な沢木啓介選手に周回遅れで抜かれる際，彼の撥ねたドロが当人の頭上を飛び越して，数 m 前を走っていた私の背中を直撃。一流選手のキック力に驚嘆！
- 昭和44年の東日本実業団駅伝で4区を走り東京海上チームは5位入賞。昭和47年の大会ではアンカーを走ったが，何故か私の後には白バイが付いていた。(19位のビリ！)
- 平均年齢60才の地元の日野走友会に入っているが，設立20周年記念の平成8年に，大学箱根駅伝往路107㎞を20人×3チームで11時間かけて駅伝。その様子を読売新聞が3日連続掲載，毎日新聞も記事。テレビ朝日がニュースで放映！
- 平成9年の第25回ホノルルマラソンで初マラソン挑戦。残り5㎞で両足痙攣し，4°06′で無念のゴール。平成10年筑波マラソンで4時間を切り雪辱を果す。2002年の第30回ホノルルマラソンにも是非参加し，3時間台で走りたい！
- 20才代後半に創設に係わった全三菱陸上競技大会。平成10年の第25回大会の50才代5000 m で銀メダル。これで同大会の金・銀・銅が揃った。学生時代は超無縁だったが，年寄も走ればメダルに当る！
  ～今後も走りを楽しみ，80才代になっても元気に走れればと思っている。～

＊フランクフルトで初マラソン　　鈴　木　　仁(S45)

長距離をやっていたもののフルマラソンの経験がなく，4年前に40才台

後半で，勤務地フランクフルトで初挑戦した。完走（3時間18分）し永年の思いは叶ったが，最後の5kmはバテ，「マラソンは35kmから」を実感した。

＊社長杯　　谷口　優（S51）

住友電工には社長杯という年1回行われる社内対抗陸上競技大会があります。走高跳に出場し，入社1年目に大会記録を作り，以後アキレス腱を痛めて練習できなくなるまで10年間出場しました。今は，近所の川原でジョギングを楽しんでおります。

＊砲丸投・円盤投　　深澤　豊（S59）

社会人としてのベストは入社直後の砲丸11ｍ50，円盤35ｍ00ですが（勿論十種は完全リタイア），適度な練習さえしていれば余り記録が落ちない投擲種目ゆえ，今年は砲丸11ｍ台を目標にフィットネスに励んでいます。

＊青梅マラソン　　日渡　淳（S62）

2月の青梅マラソンには毎年チャレンジしています。記録の方は5分／kmのペースがやっとです（30km）。